

< I . 言語研究 > 同じ話題の新聞記事の文章構造の比較 : 日米台青少年意識調査アンケート結果の報道記事について

著者	木戸 光子
雑誌名	筑波大学留学生センター日本語教育論集
号	13
ページ	1-21
発行年	1998-02-20
その他のタイトル	<I.Studies in Japanese Language>Comparison of the Discourse Structure of Five Newspaper Articles : report on the results of a survey of high school students in Japan,the United States and Taiwan
URL	http://hdl.handle.net/2241/11183

同じ話題の新聞記事の文章構造の比較

— 日米台青少年意識調査アンケート結果の報道記事について —

木戸 光子

要 旨

新聞 5 紙（朝日、産経、日経、毎日、読売）に1994年春に掲載された日米台青少年意識調査アンケート結果の報道記事について、言語形式上の特徴と内容の配列の 2 つの観点からの文章構造の分析を通して、文章構造の違いが生じる要因を探った。新聞記事は一般に構成が決まっていると言われるが、5 つの文章を分析した結果、文章構造の型は頭括型・双括型・散括型・尾括型のうちのいくつかの可能性があり、また、同じ頭括型でも文章の展開の様相は異なることがわかった。さらに、文章の統括には内容語的な統括と機能語的な統括があること、意味内容の構造と文脈の切れ続きの構造が必ずしも一致するとは限らないことを指摘した。

【キーワード】 同じ話題の新聞記事 文章構造の型 文章の統括
言語形式と内容の関係

Comparison of the Discourse Structure of Five Newspaper Articles: report on the results of a survey of high school students in Japan, the United States and Taiwan

Kido, Mitsuko

Based on an analysis of the discourse markers and the ordering of topics and comments used in five newspaper reports on a survey of high school students' attitudes in Japan, the United States and Taiwan, I demonstrate that these reports do not have a common structure. The structure of each report was unified by one or two of the following discourse parts: 1)initial part, 2)final part, 3)initial and final part, 4)other parts. I show that the flow of discourse may often vary even among reports with the same discourse structure. I observe that the unification of discourse structure is determined by the content or function of the final sentence, and that the discourse structure indicated by discourse markers does not always match the ordering of the content structure of the report.

1. 問題提起

一般に新聞記事は重要なことから先に書いてあると言われているが、いくつかの新聞を読み比べると、同じ話題の同じ内容からなる新聞記事でも随分読んでみて印象が違ふことがある。同じような内容を同じような構成・表現で書いてあるように見えても、文章構造を分析してみると、実際には文章構造は異なっており、その違いが異なった印象を与えるのではなかろうか(注1)。本稿では、同じ話題の新聞記事について言語形式上の特徴(接続表現、提題表現と反復表現、叙述表現、助詞「も」と指示表現)と、内容の配列(事実と意見)の2つの観点から文章構造を分析し、文章構造の違いが生じる要因を探る。

文章構造の分析と記述にはいくつかの方法が提案されているが、その目的は複数の語や文がどのように結びついて文章構造をなしていくかという過程を解明することである。ここでは、主として市川(1978)と寺村・佐久間・杉戸・半澤編(1990)の文章構造分析の方法を参考に、5紙(朝日、産経、日経、毎日、読売)に1994年春に掲載された日米台青少年意識調査アンケート結果の報道記事の文章A～Eを比較する。(文章A～Eは付録資料1参照)

2. アンケート調査結果の報道記事の構成

新聞記事は普通、見出し・リード(前文)・本文からなり、内容的には、結論・概要・詳述および補足からなるというが、本稿で取り上げるアンケート調査結果の報道記事の5つの文章は、

- (X) アンケート調査結果要約や話題の導入
- (Y) アンケート調査実施対象・時期など
- (Z) アンケート調査結果の詳述

の順で構成されている。冒頭にリードまたはリードにあたる部分(紙面構成をみると、文章A以外はリードがないが、記事の内容をみると本文冒頭部がリードに相当している)の(X)があり、その次の(Y)(Z)が本文になっている。

(X)と(Z)の内容の関係は、

- (X)が(Z)の要約として調査結果を万遍なくまとめている・・・文章D
- (X)が(Z)の調査結果から言える結論を述べている・・・文章B、C
- (X)が(Z)の調査結果の一部を示して(X)の導入をしている・・・文章A、E

に分けられる。Dは記事全体の内容を縮約した要約、B、Cは重要な内容のみ取り出した要約と言える。A、Eは記事全体の内容の要約ではなく内容の一部を提示しているが、記事全体の内容の縮約とも重要な内容の提示とも言い難い。

3. 言語形式上の特徴による文章構造の分析

まず、5つの文章について文章構造を言語形式上の特徴から分析する。接続表現、提題表現と反復表現、叙述表現、そして助詞「も」と指示表現を詳しく見ていく。

接続表現は文や段落の接続関係を表し、特に段落間の接続関係を表す接続表現は文章の全体構造を表すものとなる。提題表現・反復表現は文章の話題の流れを表し、特に、提題表現は文章構造の各話題のまとまりを明示し、主として助詞「は」「が」「も」や助詞相当語「について」等で示される。ただ機械的にこれらの語を含む名詞句が提題表現として文章中で機能するのではなく、文の述部に当たる叙述表現との関連で提題表現か否かは認定されるものである。叙述表現は文末の述部の形式で、文章の展開の中で書き手の意図を担っているところである。さらに、文章中のどの文とどの文が関係があるかを表すものには、文・段落相互の展開の仕方を示す接続表現のほかに、助詞「も」、指示表現がある。これらは展開の仕方というより文や段落の結びつきの強さを表すものと言える。

文章構造の分析をしたものを図1に示す。(図1は付録資料2参照)

3.1 接続表現

図1ではA④とB④、E④に使われている「それによると」、C⑥の「調査結果によると」が、実施されたアンケート調査の結果について具体的な数字をあげての詳述が始まることを表すものとなっている(注2)。特に、Eは他の4つの文章に比べて接続表現が多用しており、⑤「しかし」は④と⑤が逆接の関係で、⑨「また」、⑩「さらに」は④～⑦、⑨、⑩が添加の関係にあることを明示している。

このほか、対比の接続表現が目立つ。日米台の比較調査ということもあろうが、国ごとの対比のほかに、アンケート項目の対比も見られる。対比の「一方」「逆に」で文の接続関係を表しているB⑤「逆に」、C⑧「一方」「逆に」もある。対比の接続表現についてはC、D、Eの冒頭の①の文中にも出てくる。しかし、対比といっても列挙に近い場合と逆接に近い場合がある。C①「～一方」は⑧「一方」に呼応した関係になっており列挙に近く、E①の「～一方」は後の⑤「しかし」と呼応した関係で逆接に近い。

3.2 提題表現と反復表現

アンケート調査結果の報道記事という性質上、5つの文章とも(1)アンケート調査の設問やその答え、(2)日本・米国(アメリカ)・台湾という国名がそのまま提題表現として表されていることが多い。

5つの文章の提題表現について特徴的な点が2つある。ひとつは、「日本は」「日本の高校生は」という提題表現が「米国は」「台湾は」「米国の高校生は」「台湾の高校生は」に比べて多く出てくることである。日本語で書かれ日本で発行された新聞記事であり、日本人読者を対象にしているため、当然といえば当然であろう。しかし、文章構造の上から提題表現に「日本」が多く出てくるといのは文章全体の話題の流れが「日本」中心であることを意味する。5つの文章とも冒頭文①は提題表現として「日本の高校生は」「日本では」「日本には」が出てくることから、日米台を同じ

重みで取り上げるのではなく、日本中心の論調であることがわかる。

もうひとつは、話題の流れが、特に数字の詳述のところで、

(a) アンケート調査の設問やその答え→(b) 日本・米国（アメリカ）・台湾という国名
という順に出てきており、この逆の(b)→(a)はみられないことである。先ほど「日本」中心の論調だと述べたことと矛盾するように見える。しかし、各段落の話題はアンケート調査のそれぞれの設問や答えに従ってまとまっており、各段落の中で常に「日本」に重点がおかれている。したがって、(a)の提題表現が文章の段落の各話題を表すのに対し、(b)の提題表現は文章全体の話題を表すと言えよう。

市川(1978)は、文章中で繰り返し出てくる反復表現(市川の用語では「繰り返し語句」)について、全体にわたって反復されつつ拡充されていく「反復拡充型」と繰り返し出てきた語句が途中で切り替わり別の語句が繰り返される「変換型」があると指摘している。「日本」「米国」「台湾」という語は文章全体を通じて反復されていることから「反復拡充型」であると言える。さらに、永野(1986)の「主要語句の連鎖」の分析に見られる「主要語句」つまり文章の主題に関わる語句にあたると言えよう。

永野(1986)の「主要語句の連鎖」は文章中の複数出現する語句が文章中のどの位置にあるか(分布)、それらの語句の出現位置に基づく各語句(同語・類語にあたる語句)の関係(連鎖)をみるものである。しかし、反復語句の文章における重要度を測る基準は同語類語の出現位置の関係だけではなく、例えば、提題表現として出てくるのか、意見を表す叙述表現とともに出てくるのか、といった文章中での機能からの分析も重要である。

ここで問題にしたいのは、反復表現として出てくる語句のうち、提題表現として表されているものは他の反復表現より重要度が高いということである。この意味で提題表現として出てくることが多い「日本」は「米国」「台湾」より文章中の重要度が高いのである。

なお、キーワード研究で反復語句が取り上げられるが、文章中で1回しか出てこない語句でも文章の主題を表すことはある。5つの文章をみると、A⑪「～結論づけている。」とC⑨「～できそうだ。」という叙述表現によって文章全体の結論や書き手の意見を表す部分を示している。このことから、A⑪「将来に対する“あきらめ”」とC⑨「(米国は)よく遊びよく学ぶ元気タイプ」「(台湾は)適応的まじめタイプ」は文章の中で反復されないけれどもキーワードになっていると言えよう。

3.3 叙述表現

5つの文章全体について大まかに言えるのは、「た」で事実を、「ている」で意見を表しているということである。特に、Aは4つの文末が「ている」で、その中の②「分析している。」、⑩「みている。」、⑪「結論づけている」は意見の引用を表している。

3.4 文をつなぐ形式「も」と指示表現

A、C、D、Eの文章の「も」は、3.2の提題表現で取り上げた「(1) アンケート調査の設問やその答え」を述べる時、前に述べた話題と関連があることを示している。一方、Bでは⑧「どの国・どの地域も」という他の4つの文章とは異なった用法の「も」しかなく、助詞「は」「が」および助詞相当語「について」という提題表現によって各話題を列挙するのみである。

Eも⑩「“社会経験”も」以外には「も」はないが、⑨「また」⑩「さらに」といった添加の接続表現によっても列挙の文章構造を明示している。さらに、Eは指示表現の②「こんな結果が」、⑤「その将来に備えて」、⑦「こうした傾向は」がそれぞれの前の文を受け継ぐものとなっているので、Bより文・段落相互の結びつきが表されている。

4. 内容の配列と言語形式上の特徴による文章構造の分析

3で分析した言語形式上の特徴により各文章の文章構造と意味のまとまりが見えてきたが、さらに、内容の配列の面を加えて文章構造を分析する。図2は、アート「アンケート調査の設問やその答えについての結果など事実を述べた文（または文の一部）」と、あ～す「アンケート調査結果から導き出した意見を述べた文（または文の一部）」について、文章中の出現位置を表にしたものである。これによって、事実と意見がどのような配列で展開されているか、反復表現がどのように展開されているかを3の言語形式上の特徴の分析とともに考察する。（図2は付録資料3参照）

4.1 Aの文章構造

Aでは、「現在享楽志向」が②→⑦→⑪と出現し、冒頭(X)部の②と末尾文⑪が呼応している。さらに、⑦「『現在享楽志向』は勉強の面にも表れており」と、「現在享楽志向」という意見が提題表現になっているのはこの⑦のみで、助詞「も」によっても前出の「現在享楽志向」との関連が示されている。

⑧～⑩も冒頭(X)部には出てこなかった話題だが、⑦のように前出の話題との関連付けを示す言語形式上の特徴はなく、⑧「将来の仕事については」と付加的な話題が列挙される。また、冒頭(X)部に出てくる「ボランティア」は他の事実とも意見とも関連がみられないので、文章構造に深く関わるものではなく付加的なものであると言える。

⑪は市川(1987)の文章の結尾の型のうち「叙述内容の集約としての結尾」であり、文章全体の主題に深く関わるものである。したがって、Aの文章構造は「日本」が中心話題で、かつ「現在享楽志向」が繰り返し出てきて、さらに⑦のように「現在享楽志向」が提題表現になり他の事実との関連づけがなされていることから考えれば双括型になる。しかし、⑪「結論づけられている。」という叙述表現からみると、文章の末尾に結論にあたる意見を述べていることから尾括型とも考えられる。

Aを尾括型と考えた場合は、日本だけでなく日米台のそれぞれの高校生の価値観のタイプが結論

となるが、②と⑪との呼応を考えると双括型とみる方が妥当かもしれない。3で指摘した叙述表現「ている」の多用から考えると、内容は意見だけれども表現は意見を引用しているという記述の仕方をしている。このことから末尾文⑪のみが文章全体を統括しているとは言い難い。

4.2 Bの文章構造

Bでは、冒頭(X)部①②の内容は⑥以降には出てこない。⑥「自分の将来の生活について」以降は提題表現によってアンケート調査結果の事実を列挙するのみだが、⑨「意外だったのは」に続く⑨⑩で書き手の主観を示しているのが目立つ。末尾文⑪で意見が出てくるが、ボランティアの話題はここで初めて出てくる話題で、前出の文との関連を示す言語形式もないことから、単なる付加にすぎず、市川(1978)の「本題に対するつけたりとしての結尾」のうちの「本題と関連のある事柄や感想などを、つけたりとして添える」にあたるものである。したがって、Bの文章構造は「現在享楽志向」を結論とする頭括型と考えられる。

4.3 Cの文章構造

①②→⑥「仕事より結婚」と①③→⑦「個人主義的な傾向」、そして、①②→⑧「今を楽しむ」と①→⑨「現在享楽志向」の呼応がはっきりしている。①「・・・一方で」と⑧「一方」によって両者を列挙している文章構造が明示されており、2つの意見「個人主義的な傾向」と「現在享楽志向」が結論であることがわかる。

Cの文章構造は、頭括型と言ってもよいが、冒頭(X)部①～③と詳述の⑥～⑨の呼応が明確であることから散括型とも考えられる。なお、⑥⑦と⑧⑨の2つの段落内は、は「事実+意見」+「一方」+「事実+意見」で、どちらも段落末尾の「意見」が事実を統括している尾括型になっている。

4.4 Dの文章構造

他の4つの文章に比べて、冒頭(X)部の①～③に多くの内容が盛り込まれているため、冒頭(X)部①②③が総覧的な要約となっている。しかし、要約と言っても②の「会社に依存したくない」の内容はこれ以降には出てきていない。

⑤以降の詳述のところはそれぞれ冒頭(X)部に呼応しているが、①→⑤+⑥、①→⑦+⑧⑨のように、①に⑥や⑧⑨の内容が付加されている。また、「も」で文のつながりを示しているが、各話題が明確に関連づけられていなくて、各文のまとまりがはっきりしないため段落相互の関係があいまいである。⑦～⑨について、⑦⑧は「将来」、⑧⑨は「勉強」という共通内容で関連してはいるが、話題の流れとしては「将来悲観的→将来に備えて勉強→勉強意欲」と連想関係のように出てくる。

⑪の末尾文にも総覧的に意見が盛り込まれているが、市川(1978)の「叙述内容の集約としての結尾」の中の特に「主題・要旨・提案などを述べる」にあたると考えられる。直前の⑩「世話好き」への言及があることから、⑩の事実に対する意見でもある。

Dの文章構造は、頭括型、または、双括型かと思うが、文と文とのつながりはあるけれども内容が交錯していて意味のまとまりや段落相互の関係があいまいなため、はっきりとは言えない。

4.5 Eの文章構造

Eの文章構造は、3で指摘したように接続表現や指示表現を使って文章構造を明示している。しかし、内容の配列とあわせて検討すると、必ずしも文章構造が明確とは言えない。

まず、①「・・・一方」と、④「しかし」⑤⑥の呼応関係ははっきりしている。

次に、⑦以降は前出していない内容のみが出てくるのだが、⑦「こうした傾向は」で前出の内容と関連づけている。⑨「また」、⑩「さらに」はそれぞれ「事実＋意見」から段落がなっているのに対し、⑦⑧は前出の④⑤と同じ傾向だという事実関係は示されるが、どんな点で同じ傾向かという意見が明示されていない。だから、③「その価値観の違い」が④⑤と⑦⑧では何を意味するのか表されていないのである。

それから、⑨「また」、⑩「さらに」の添加の接続表現は単に付加的なものなのかどうかははっきりしない。⑨⑩は前出ではない内容で言語形式上のつながりもみられないが、意見が出てくることから「その価値観の違い」を示しているとも考えられる。接続表現と指示表現からみると、①～⑧までの事実関係の指摘が主で、⑨⑩は付加的な内容だと思われるが、③「その価値観の違いを探った。」の指示内容が①②の前出のものだけなのかどうかの判断がつかねる。

Eの文章構造は、頭括型か、散括型かと考えられるが、接続表現や指示表現によって一見文章構造が明確なようにみえて実は内容との関連が今ひとつあいまいなため、はっきりしたことは言えない。文章中で重要な内容かどうかの位置づけがEの文章構造には明示されていないのである。

4.6 文章構造の型

A～Eの文章構造の型は次のとおりである。

表1 A～Eの文章構造の型

A		双括型		尾括型
B	頭括型			
C	頭括型		散括型	
D	頭括型？	双括型？		
E	頭括型？		散括型？	

以上、文章構造を分析し、文章内部の関係および各文章間での異同を見てきたが、これらの分析と記述をまとめるものとして文章の統括について検討する。

市川(1978)は、文章の内容を支配し文章の内容に関与することによって文章全体をくくりまとめる機能を「統括」と規定し、統括機能をもつ段落が文章の構成形式を決めるという。文章の単位と

いう点からみれば統括機能を担うのは段落ということになるだろうが、統括機能を担うのは段落だけということではない。統括機能を担ういろいろな言語形式があり、それらが互いに関連しあって各段落を形成し、さらに文章構造をなしていくものである。だから、内容の配列、各言語形式の関連を分析していくと、文章構造がなりたっていく過程がみえてくるはずである。

2と3と4で試みた分析では、文章構造の手がかりとなる言語形式を追って、さらに内容の配列との関連をみていったが、文章構造の型の分析にいたって、どんな型か認定できないものがあった。また、同じ頭括型や双括型などの間でもどのように文章の展開がなされていくかは異なる。さらに、どの種類の形式が文章構造の手がかりとなるのかは各文章によって異なるし、言語形式上の特徴が必ずしも内容の配列を明示するものではないとも言える。

文章における統括の力は相対的に決まるものだといふ述べたが（注3）、今回の分析を通してわかったのは、統括にはいくつか種類があるのではないかということである。つまり、文章の統括には内容語的なものと機能語的なものがあると言えよう。例えば、末尾文の内容が意見で終わっていても、A、C、Dの末尾文の「叙述内容の集約としての結尾」はいわば内容語的な働きをする統括である。これに対して、B、Eの末尾文は「本題に対するつけたりとしての結尾」であり、いわば機能語的な働きをする統括である。「機能語」的というのは、文章の展開機能からは文章を完結させるという働きがAからEの末尾文にはあるが、完結させるだけのものであって、文章の内容面からは重要な意味をもたないものだということである。したがって、B、Eは尾括型や双括型ではありえない。

同じく末尾文が意見でも内容語的統括と機能語的統括に分かれる違いは何かというと、この5つの文章では、前出の内容か新しく出てきた内容かということに左右されている。C、Dの末尾文については冒頭(X)部の前出の「事実+意見」が、Aについては意見が繰り返されている。これに対し、B、Eはそのような繰り返しはなく、「事実」も「意見」も新しく出てきた内容からなる。Eでは「さらに」という接続表現があるが、その前の「また」とともに前出の文とのつながりが添加以外には見られず、前出の文脈と切り離されているため、単なる付加意見になっている。

それから、樺島(1979)の、文章の「意味内容の構造」と「文脈の切れ続きの構造」は必ずしも一致するとは限らないと言える（注4）。Cのように文章の意味内容と言語形式上の特徴の対応が明確なものと、DやEのようにそうでないものがあるが、良い文章・悪い文章という判断以前に、文章として文章構造の分析がしにくいものがあるということである。分析しにくい原因は、Dのように意味のまとまりがはっきりせず、文相互・段落相互の関係があいまいなことがあるためである。また、Eのように段落の区切りや段落相互の関係は接続表現等で明示されているが、事実の基調にある意見が言語形式として明示されていないため文章構造の型がはっきりしないものもある。

5. おわりに

文章論においてこれまで文章構造分析は、主に文章における言語形式上の特徴を見つけ、その分

布を調べたり連鎖の様相を文章の流れにそって追っていくものであった。しかし、言語形式上の特徴が意味内容の構造を反映していないとすれば、言語形式上の特徴のみを手がかりに文章構造分析をすすめるだけでは文章構造の様相の解明には不十分だということを意味する(注5)。したがって、文章構造分析は、言語形式上の特徴にあられる文脈の切れ続きの構造と意味内容の構造の双方から行う必要がある。ここで取り上げた5つの文章の文章構造は、一見同じようであるが実は異なっていることも、双方からの分析により明らかになったことである。

注

- (1) 森野(1977)は、老夫婦の死を報道した新聞2紙の記事について段落布置を中心に文章構成を比較しており、同じ話題の記事でも頭括型か尾括型かによって異なる表現効果がもたらされているという指摘をしている。
- (2) 本稿では寺村・佐久間・杉戸・半澤編(1990)にしたがって、単語や品詞単位で言語形式を捉えないという意味で「接続表現」「提題表現」「叙述表現」「指示表現」とする。例えば、ここで「それによって」を「接続表現」とするのは、「接続詞」「指示詞」「助詞相当語」(あるいは複合辞)のような単語単位では、文章構造を表すものとしての言語形式を捉えにくいためである。
- (3) 木戸(1992a)(1996)参照。
- (4) 樺島(1979)は文章の構造が第1層「意図の構造」—意図が互いに関係しあって作るトリー構造、第2層「意味内容の構造」—その文章で述べる事柄・意味内容が作る構造、第3層「文脈の切れ続きの構造」—第2層までで出来た文章の構造には、すでに、文章の部分間の切れ続きの関係が意味的に成立しており、これを具体的なカタチにして示すものの、という3層によって組み立てられていると述べている。本稿の言語形式上の特徴と内容の配列の2つの観点からの文章構造の分析は、「文脈の切れ続きの構造」と「意味内容の構造」の分析に相当するだろう。
- (5) さらに付け加えると、樺島(1979)の文章構造の3層の解明のため、言語面からのアプローチによる文章構造分析としてできることは、おそらく言語形式上の特徴や内容の配列のように文章の中で表現されたものだけでなく、言語形式として明示されてはいないけれどもその関係が暗示されている場合の文章構造分析もすることであろう。例えば、佐久間(1996)に指摘されているように市川(1978)の文の接続関係のうち接続表現が想定できない「連鎖型」の解明や、寺村(1984,1986)において接続詞や係助詞・副助詞などで「影の統括命題」と呼ばれているものの意味用法の解明がこれにあたる。

参考文献

1. 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
2. 樺島忠夫(1979)『日本語のスタイルブック』大修館書店
3. 樺島忠夫(1983)「文章構造」『朝倉日本語講座5 運用Ⅰ』水谷静夫編、朝倉書店

4. 樺島忠夫(1992)『文章作成の技術』三省堂
5. 木戸光子(1989)「文の機能による要約文の特徴」『文章構造と要約文の諸相』佐久間まゆみ編、くろしお出版
6. 木戸光子(1992a)「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』55：9-19
7. 木戸光子(1992b)「要約文Bの出力パタンの日韓比較」『要約文の表現類型—日本語教育と国語教育のために』佐久間まゆみ編、ひつじ書房
8. 木戸光子(1995)「マスコミの文章」『国文学 解釈と教材の研究』學燈社、40-2：95-115
9. 木戸光子(1996)「文の配列における文の機能の認定—文章からみた表現としての事実と意見」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12：1-10
10. 木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中央公論社
11. 木下是雄(1990)『レポートの組み立て方』筑摩書房
12. 言語技術の会編(1990)『実践・言語技術入門』朝日出版社
13. 佐久間まゆみ(1987)「論説文の文章・文段と要約文の類型について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』2：1-29
14. 佐久間まゆみ(1996)「文の文法と文連続の文法—文章の文法への志向」『日本語学』15-9：32-40
15. 千石保(1991)『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会
16. 寺村秀夫(1984)「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモの場合」『日本語学』3-8：67-74
17. 寺村秀夫(1986)『「前提」「含意」と「影」』『論集日本語研究(一)：現代編』明治書院
18. 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編(1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
19. 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
20. 永野賢(1986)『文章論総説』朝倉書店
21. 林四郎(1975)「新聞リードの文章」『文学探究の言語学』明治書院(再録。初出は『新聞研究』147,148号 1963年)
22. 森野宗明(1977)「いろいろな文章構成」『現代作文講座5 作文の技術』林大・林四郎・森岡健二編、明治書院

付録資料1 引用した記事の文章

(A朝日、B産経、C日経、D毎日、E読売。ⅠⅡ・・・は形式段落番号、①②・・・は文番号。)

A (1994年5月8日付朝刊)

日本の高校生半数以上「将来より今を楽しむ」、米・台湾との比較調査、ボランティア参加 米の15分の1

- Ⅰ①ボランティア活動をしている日本の高校生は四・三％で、米国の十五分の一にすぎないことが七日、財団法人日本青少年研究所（東京都新宿区、千石保・理事長）などが行った高校生ライフスタイル国際比較調査でわかった。
- ②日本では「先のことを考えず、今を楽しむ」と答えた高校生が半数を超え、同研究所は「日本の高校生は『現在享楽志向』が強い」と分析している。
- Ⅱ③調査は昨年秋、日本と米国、台湾で、各国・地域の高校生全体の縮図となるよう、無作為に高校を選び、それぞれ計約千人の在学中の高校生を抽出して行った。
- Ⅲ④それによると、ボランティア活動に参加している高校生は、米国が六五・五％で、台湾が五・九％、日本は四・三％だった。
- ⑤日本は両親のボランティア参加率も低く、父親を例にとると、米国四二・一％、台湾八・六％に対して、四・九％。
- Ⅳ⑥ライフスタイルを問う設問では、日本の高校生の五一・七％が「先のことを考えず、今を楽しむ」と答え、米国の二二・三％、台湾の一三・〇％を大きく引き離している。
- ⑦「現在享楽志向」は勉強の面にも表れており、「将来に備えて勉強しておくべきだ」と答えた高校生は、台湾七六・九％、米国六五・二％、日本四七・三％だった。
- Ⅴ⑧将来の仕事については、「できるだけ大きな会社で働き一生を送りたい」と「自分の腕に職を付けて会社に依存しないで生きたい」の二者択一を求めたところ、日本では終身雇用派は三三・四％にすぎず、米国では逆に五六・九％が終身雇用を支持した。
- ⑨台湾は四三・六％だった。
- ⑩報告書は「日本の高校生の脱管理志向の強さの表れ」とみている。
- Ⅵ⑪日本青少年研究所は、生徒の価値観でみると、日本は「現在志向的享楽タイプ」、米国は「よく遊びよく学ぶ元気タイプ」、台湾は「適応的まじめタイプ」の生徒がそれぞれ多いと結論づけている。

B (1994年5月8日付朝刊)

ライフスタイル調査 高校生・いまを楽しむ日本、将来に備える米台

- I ①将来に備えて勉強するより、現在を大いに楽しむべきだと考えている高校生が日本では五三％に達し、米国や台湾を大幅に上回っていることが七日、文部省所管の財団法人「日本青少年研究所」(千石保所長)の高校生のライフスタイルに関する調査で分かった。
- II ②日本の高校生のほぼ四人に一人が将来を悲観的に見ており、「今を楽しむ」享楽志向が強いことをうかがわせている。
- III ③調査は昨年十一月、日、米、台湾の高校生約千人ずつを対象に実施した。
- IV ④それによると、若い時は「現在を大いに楽しむべきだ」としたのは日本五三％、米三五％、台湾二三％の順。
- ⑤逆に「将来に備えて勉強」は台湾七七％、米六五％、日本四七％で日本が最も低かった。
- V ⑥自分の将来の生活について「あまりよくない」「駄目だろう」と見ているのは日本が二三％。
- ⑦台湾の七％、米三％に比べ多いのが際立った。
- VI ⑧「今、一番したいこと」という質問では、どの国・地域も「好きな異性と一緒にいること」がトップだが、実際に「異性にもてる」と回答したのは米が八一％、台湾が五八％に対し日本はわずか一二％。
- VII ⑨意外だったのは仕事への態度。
- ⑩「寄らば大樹」に通じる「大きな会社で働き、一生を送りたい」というのは日本が三三％で最も低く(米五七％、台湾四四％)、手に職をつけ、会社に依存しないで生きたいという脱会社志向が目立った。
- VIII ⑪ボランティアについて日米で比較すると「している」高校生は日本四％、米六六％、父親は日本五％、米四二％、母親は日本九％、米五七％で、社会全体のボランティア活動に対する意識の差をうかがわせた。

C (1994年5月8日付朝刊)

日本の高校生は享楽派、「今を楽しむ」半数、日本青少年研究所3カ国・地域調査 米・台の2倍以上

- I ①日本の高校生は「仕事より結婚」と考えるなど、個人の生活を大切にしたいと思っている一方で、「今を楽しみたい」とする“現在享楽志向”が強いことが七日、日本、米国、台湾の三カ国・地域を対象に、「日本青少年研究所」(千石保理事長)などが実施した「高校生ライフスタイル調査」でわかった。
- ②「仕事より結婚」派は日本で約七割に達し、米国、台湾を上回ったほか、「先のことを考えず、今を楽しみたい」とする生徒の割合も米国などの二倍以上。

- ③同研究所などでは「日本で個人主義的な傾向が強まった結果」と分析している。
- Ⅱ④調査は、同研究所と高校生を対象とした文化振興事業などを手掛ける「一ツ橋文芸教育振興会」(若菜正理事長)が共同で、昨年秋に実施。
- ⑤日・米・台湾それぞれ千人強の高校生から回答を得た。
- Ⅲ⑥調査結果によると、「良い仕事か結婚か」の問いに、「良い結婚」と答えた高校生は日本で六九・四%に上り、米国の六二・二%、台湾の三八・四%を上回った。
- ⑦「家族それぞれ、自分のしたいことをすればいい」とする高校生も、日本で六一・五%と、米国(四〇・二%)、台湾(四九・七%)より多く、個人主義的な傾向が強いことがうかがえる。
- Ⅳ⑧一方、「先のことを考えず、今をエンジョイしたい」とする日本の高校生は五一・七%で、米国(二二・三%)、台湾(一三・〇%)を大きく上回り、逆に「将来に備えて勉強する」という高校生は四七・三%で、米国(六五・二%)、台湾(七六・九%)より少なかった。
- Ⅴ⑨「将来の生活はどうか」との問いには、「だめだろう」「あまりよくない」とする高校生が日本では二三・三%と、米国の三・一%などに比べ際立って多く、将来に対する“あきらめ”が現在享楽志向に反映しているとみることもできそうだ。

D (1994年5月8日付朝刊)

日本の高校生「今が良ければ…」、日・米・台比較調査 享乐的傾向、勉学の意欲は最低

◇日本・アメリカ・台湾

- Ⅰ①日本の高校生は自分の将来を「あまりよくない」と悲観的に見る一方、「いまをエンジョイする」という享乐的な傾向が強いことが七日、財団法人日本青少年研究所(千石保理事長)の日本、米国、台湾の高校生の比較調査で分かった。
- ②勉強への意欲は三カ国・地域中最も低く、仕事では「会社に依存したくない」という組織嫌いが多数派。
- ③自分が「世話好きだ」と考える人やボランティア活動の経験者は最も少なく、他人とのかかわりを望まない日本の高校生像が浮かび上がった。
- Ⅱ④調査は日本十二校、米国二十二校、台湾十校の高校生計約三千人を対象に昨秋に実施。
- ⑤ライフスタイルや価値観を問う質問では「先のことを考えず、いまをエンジョイする」が米国二二%、台湾一三%に対し、日本は五二%と過半数。
- ⑥「家族それぞれ、自分のしたいことをする」は六二%、「相手が間違っているときはそれを指摘して自分の意見をいう」も六五%で、三カ国・地域中最も多く、享楽志向とともに自分の価値観にこだわる姿勢も色濃く表れた。
- Ⅲ⑦自分の将来について「あまりよくない」「駄目だろう」と悲観的な高校生は、日本が二三%と米国(三%)、台湾(七%)を大きく上回った。
- ⑧「将来に備え勉強しておくべきだ」と「将来を思い悩むよりその時を楽しむべきだ」の二者択

一で「勉強」を選んだのは米国六五%、台湾七七%に対し、日本は四七%。

⑨自分が「よく勉強するほうだ」という答えも日本は一〇%と極端に少なく、日本の高校生の勉強意欲の低さが目立つ。

Ⅳ⑩ボランティア経験は日本四%、台湾六%に対し、米国六六%と文化の違いが表れたが、自分が「世話好き」と考えている生徒も米国八九%、台湾八三%に比べ、日本は五〇%と少なかった。

Ⅴ⑪同研究所では「修業感覚を欠いた現在中心の快樂志向が日本の若者の特徴。『世話好き』の少なさは日本がそうした対人関係のモラルの継承に失敗したことを示す」と分析している。

E (1994年6月12日付朝刊)

手に職つけ生きたいけど見通し暗い、日本の高校生「今をエンジョイも」、米・台湾と比較調査

Ⅰ①「手に職をつけて会社に依存しないで生きたい」と夢を語る一方、将来の生活は「あまりよくない」「ダメだろう」と悲観的に考える高校生が日本には多い。

②こんな結果が、日・米・台湾の高校生を対象にした日本青少年研究所（千石保理事長）の「ライフスタイル調査」で明らかになった。

Ⅱ③調査は、昨年秋、日本、アメリカ、台湾の高校生各千人を対象に実施し、その価値観の違いを探った。

Ⅲ④それによると、「できるだけ自分の手に職をつけて会社に依存しないで生きたい」と答えた高校生は、日本は六六・六%で、アメリカ（四三・一%）、台湾（五六・四%）を上回り、最も高い比率となった。

Ⅳ⑤しかし、その将来に備えて「今からしっかりと勉強しておくべきだ」という高校生は、台湾の七六・九%、アメリカの六五・二%に比べ、日本は四七・三%と一番低く、将来の展望についても、日本の高校生の四人に一人（二三・三%）は「あまりよくない」「ダメだろう」と回答。

⑥アメリカの三・三%、台湾の七・四%を大きく上回った。

Ⅴ⑦こうした傾向は、生活態度にも現れ、「先のことを考えず、今をエンジョイするほうだ」と回答した高校生は日本の場合五一・七%。

⑧アメリカ（二二・三%）の二倍強、台湾（一三%）の四倍近くに上り、突出していた。

Ⅵ⑨また、「世話好きなほうですか」という設問に対して、「まったくそう思う」と答えた高校生は、日本が七・八%、アメリカが三四・八%、台湾が三一・二%で日本の高校生の個人主義的傾向がうかがえる。

Ⅶ⑩さらに、ボランティアに取り組んでいる生徒は四・三%で、台湾の五・九%とほぼ並んでいるものの、アメリカの高校生（六五・五%）に比べると十五分の一にとどまり、“社会体験”も乏しい日本の高校生像が浮き彫りになっている。

付録資料2 図1 言語形式上の特徴による文章構造の分析

※文の内容は、事実、事実(主)、意見、意見(引)の4種に分けた。

事実(主)は事実だけでも主観的な表現で表された事実を示し、意見(引)とは元の調査結果から引用されたと見られる意見を示す。

図1-1 言語形式上の特徴による文章構造の分析(文章A)

構 段文 成 落	接続表現	提題表現(「は」「が」「について」等)、「も」および指示表現	叙述表現(「-た」「-ている」)	文の内容	意味の まとめ
(X) I ① ②		ボランティア活動をしている日本の高校生は 米国の十五分の一にすぎないことが 日本では 「先のことを考えず、今を楽しむ」と答えた高校生が 同研究所は 「日本の高校生は 『現在享楽志向』が	四・三%で、 わかった。 半数を超え、 強い」と 分析している。	事実+事実(主) 事実+意見(引)]
(Y) II ③		調査は	行った。	事実	
(Z) III ④ ⑤ IV ⑥ ⑦ V ⑧ ⑨ ⑩ VI ⑪	それによると、 父親を例にとると、 逆に 生徒の価値観でみると	ボランティア活動に参加している高校生は、 米国の 台湾が 日本は 日本は 両親のボランティア参加率も ライフスタイルを問う設問では、 日本の高校生の五一・七%が 「現在享楽志向」は 勉強の面にも 「将来に備えて勉強しておくべきだ」と答えた高校生は、 将来の仕事については、 日本では 終身雇用派は 米国では 五六・九%が 台湾は 韓国は 日本青少年研究所は、 日本は 米国は 台湾は 生徒が	六五・五%で、 五・九%、 四・三%だった。 低く、 四・九%。 答え、 大きく引き離している。 表れており、 日本四七・三%だった。 三三・四%にすぎず、 支持した。 四三・六%だった。 みている。 「現在志向の享楽タイプ」、 「よく遊びよく学ぶ元気タイプ」 「適応的まじめタイプ」の 多いと 結論づけている。	事実 事実 事実(主)+事実 事実(主)+事実 事実 意見(引) 意見(引)]

図1-2 言語形式上の特徴による文章構造の分析 (文章B)

構 段文 成 落	接続表現	提題表現 (「は」「が」「について」等)、「も」および指示表現	叙述表現 (「-た」「-ている」)	文の内容	意味の まとめ
(X) I ①		現在を大いに楽しむべきだと考えている高校生が		事実(主)]
II ②		日本では 大幅に上回っていることが 日本の高校生のほぼ四人に一人が 「今を楽しむ」卒業志向が	五三%に達し、 分かった。 悲観的に見ており、 強い(ことを) うかがわせている。	事実(主)+意見	
(Y) III ③		調査は	実施した。	事実]
(Z) IV ④	それによると、	若い時は 「現在を大いに楽しむべきだ」としたのは	順。	事実]
⑤	逆に	「将来に備えて勉強」は 日本が 自分の将来の生活について 「あまりよくない」「駄目だろう」と見ているのは 日本が 多いのが	日本四七%で 最も低かった。	事実(主)+事実(主)	
V ⑥		「今、一番したいこと」という質問では、 「好きな異性と一緒にいること」が 「異性にもてる」と回答したのは 米が 台湾が 日本は	二二%。 際立った。	事実]
VI ⑦		意外だったのは 「大きな会社で働き、一生を送りたい」というのは 日本が 脱会社志向が ボランティアについて	トップだが、 八一%、 五八% (に対し) わずか一二%。 仕事への態度。	事実(主) 事実+事実(主)	
VII ⑧		「している」高校生は 父親は 母親は	三三%で最も低く 目立った。	意見 事実(主)+意見]
VIII ⑨	日米で比較すると		日本四%、米六六%、 日本五%、米四二%、 日本九%、米五七%で、 うかがわせた。	事実+意見	

図 1-3 言語形式上の特徴による文章構造の分析 (文章C)

傍 段文 成 落	接続表現	提題表現 (「は」「が」「について」等)、「も」および <u>量量表現</u>	叙述表現 (「-た」「-ている」)	文の内容	意味の まとめ
(X) I ①	…一方で、	日本の高校生は	思っている	事実(主)]
②		“現在卒業志向”が 強いことが 「日本青少年研究所」(千石保理事長)などが	実施した わかった。 日本で約七割に達し、 上回った(ほか、) 二倍以上。	事実(主)	
③		「仕事より結婚」派は 生徒の割合も 同研究所などでは 個人主義的な傾向が	強まった(結果)と 分析している。	意見(引)	
(Y) II ④		調査は、 同研究所と…「一ツ橋文芸教育振興会」…が	実施。 得た。	事実]
⑤				事実	
(Z) III ⑥	調査結果によると、	「良い仕事か結婚か」の問いに、 「良い結婚」と答えた高校生は	六九・四%に上り、 上回った。 六一・五%と…多く、	事実(主)]
⑦		「家族…自分のしたい…」とする高校生も、 個人主義的な傾向が 強いことが	うかがえる。	事実(主)+意見	
IV ⑧	一方、	「先のことを考えず、今をエンジョイしたい」とする日本の高校生は	五一・七%で、 大きく上回り、	事実(主)]
	<u>逆に</u>	「将来に備えて勉強する」という高校生は	四七・三%で、 少なかった。	事実(主)+意見	
V ⑨		「将来の生活はどうか」との問いには、 「だめだろう」「あまりよくない」とする高校生が 日本では 将来に対する“あきらめ”が みることも	二三・三%と…顕立って多く、 反映していると 見える。]

図1-4 言語形式上の特徴による文章構造の分析 (文章D)

構 段文 成 落	接続表現	話題表現 (「は」「が」「について」等)、「も」および指示表現	叙述表現 (「-た」「-ている」)	文の内容	意味の まとめ
(X) I ①	…一方	日本の高校生は	悲観的に見る	事実(主)]
②		専断的な傾向が 強いことが	分かった。 最も低く、	事実(主)	
③		勉強への意欲は 仕事では 組織嫌いが 自分が	多数派。	事実(主)+意見	
		世話好きだ」と考える人やボランティア活動の経験者は 他人とのかわりを望まない日本の高校生像が	最も少なく、 浮かび上がった。		
(Y) II ④		調査は	実施。	事実(主)+意見]
(Z) ⑤		ライフスタイルや価値観を問う質問では 「先のことを考えず、いまをエンジョイする」が 日本は	五二%と過半数。 六二%、 六五%で、 最も多く、 色濃く表れた。	事実(主)]
⑥		「家族それぞれ、自分のしたいことをする」は 「相手が間違っている…意見をいう」も		事実+事実(主) +意見	
III ⑦		自分の価値観にこだわる姿勢も 自分の将来について 悲観的な高校生は、 日本が	二二%と…大きく上回った。	事実(主)	
⑧		「勉強」を選んだのは 日本は	四七%。	事実	
⑨		自分が 「よく勉強するほうだ」という答えも 日本は	一〇%と極端に少なく、 目立つ。 米国六六%と 表れたが、	事実(主)]
IV ⑩		日本の高校生の勉強意欲の低さが ボランティア経験は 文化の違いが 自分が		意見+事実(主)	
V ⑪		「世話好き」と考えている生徒も 日本は 同研究所では 「…現在中心の快楽志向が 「世話好き」の少なさは 日本が	五〇%と少なかった。 日本の若者の特徴。 失敗したことを 示す」と 分析している。	意見(引)]

図1-5 言語形式上の特徴による文章構造の分析 (文章E)

構 段文 成 格	接続表現	提題表現 (「は」「が」「について」等)、「も」および指示表現	叙述表現 (「-た」「-ている」)	文の内容	意味の まとまり
(X) I ①	…一方、	将来の生活は 悲観的に考える高校生が 日本には <u>こんな結果が、</u>	多い。 明らかになった。	事実(主)]
②				事実(主)	
(Y) II ③		調査は、 <u>その価値観の違いを</u>	実施し、 探った。	事実]
(Z) III ④	それによると	「…会社に依存しないで生きたい」と答えた高校生は、 日本は		事実(主)	
IV ⑤	しかし、	<u>その将来に備えて</u> 「今からしっかりと勉強しておくべきだ」という高校生は、 日本は 将来の展望についても、 日本の高校生の四人に一人(二三・三%)は	六六・六%で…上回り、 最も高い比率となった。	事実(主)]
⑥		<u>こうした傾向は、</u> 生活態度にも	四七・三%と一番低く、		
V ⑦		「先の…今をエンジョイするほうだ」と回答した高校生は 日本の場合	…「ダメだろう」と回答。 大きく上回った。	事実(主) 意見+事実]
⑧			現れ、		
VI ⑨	また、		五一・七%。 上り、突出していた。	事実(主) 事実+意見]
		「世話好きなほうですか」という設問に対して、 「まったくそう思う」と答えた高校生は、 日本が アメリカが 台湾が 日本の高校生の個人主義的傾向が	七・八%。 三四・八%。 三一・二%で うかがえる。		
VII ⑩	さらに、	ボランティアに取り組んでいる生徒は	四・三%で、 …ほぼ並んでいるものの、 …十五分の一にとどまり、 乏しい 浮き彫りになっている。	事実(主)+意見]
		“社会体験”も 日本の高校生像が			

付録資料3 図2-1 内容の配列による文章構造の分析 (内容別)

※ ア～テ：事実 (ア～スはアンケート調査の質問そのもの、セ～テはアンケート調査の話題等)
あ～す：意見
○はその内容が文章中にあることを示す

(略) 内容	文章A	文章B	文章C	文章D	文章E
ア 楽し—先のことは考えず今を楽しむ	○	○	○	○	○
イ 若—若い時は現在を大いに楽しむ		○			
ウ 持だ—自分の将来についてだめだろう		○	○	○	○
エ 持勉—将来に備えて勉強する	○	○	○	○	○
オ 勉強—自分がよく勉強するほうだ				○	
カ 会社—大きな会社で働き一生を送りたい	○	○		○	○
キ 手職—手に職をつけて会社に依存しないで働きたい	○	○		○	○
ク ボラ—ボランティアに参加している	○	○		○	
ク ボ親—親がボランティアに参加している	○	○		○	○
ケ 世話—世話好きなほうだ			○	○	
コ 家族—家族それぞれ自分のしたいことをする		○			
サ 異性—一番したいことは好きな異性と一緒にいる、異性にもてる			○		
シ 結婚—良い仕事より結婚が大切だ				○	
ス 間違—相手が間違っているときは指摘し自分の意見を言う					
セ 調査—調査について	○		○	○	○
ソ ライ—ライフスタイルについて	○		○	○	○
タ 価値—価値観について	○				○
チ 持生—将来の生活について		○		○	
ツ 仕事—仕事について		○			
テ 一番—一番したいことについて					
あ 享楽—現在享楽志向、享楽志向	○		○	○	
い 悲観—将来悲観的、あきらめ	○		○		
う 終雇—終身雇用派	○	○		○	
え 脱会—脱会社志向、脱管理、脱組織			○	○	○
お 個人—個人主義的傾向				○	
か 他人—他人とのかかわりを望まない				○	
き 対人—対人関係のモラル継承失敗				○	
く 自価—自分の価値観にこだわる		○		○	
け 意差—意識の差					
こ 社経—社会経験					○
さ 文差—文化の違い				○	
し 元気—よく遊びよく学ぶ元気タイプ	○				
す まじ—適応的まじめタイプ	○				

図2-2 内容の配列による文章構造の分析 (文による出現順)

記事構成	文章A			文章B			文章C			文章D			文章E		
	X	Y	Z	X	Y	Z	X	Y	Z	X	Y	Z	X	Y	Z
アイウエオカキク ケコサシス	② ①		⑥ ⑦ ⑧⑨ ⑧	①② ④ ⑤⑥⑦ ⑩ ⑩⑪ ⑪		⑧ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥	①② ①②		⑧ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥	① ① ② ② ③ ③		⑤ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑩⑪ ⑥ ⑥	① ①		⑦⑧ ⑤⑥ ⑤ ④ ⑩ ⑨
センタチツテ	①	③	⑥ ⑪		③	⑧ ⑨ ⑧	①	④⑤	⑨		④	⑤ ⑤ ⑤	②	③ ③	⑦ ⑤
あいうえおかきくけこさしず	②		⑦ ⑧ ⑩ ⑪ ⑪			⑩ ⑪	① ①②		⑨ ⑨ ⑦	① ① ② ③		⑥ ⑦ ⑤ ⑪ ⑩			⑨ ⑩